

「主旋律」から

人間よおごるなかれ

(「音楽人通信」一九九四年七月／八月合併号)

今年は凄い夏だった。去年とうって変わって、猛暑。各地で最高気温やら、真夏日連続、熱帯夜連続など、数々の記録を更新した。日本だけではない。パリでもウイーンでも、そして北京も凄い暑さだったらしい。

私たちの地球はどうかしてしまったのだろうか。過剰な二酸化炭素による地球の温暖化は着実に進んでいるそうだが、今夏の暑さはその直接の結果ではないらしい。二重に高気圧が覆つ

たから、というのだが、それがなぜなのかは説明されていない。

わずかにだが、それ恐ろしさが背中の方からそつと忍びよってきているように感じるのは、主旋律子だけだろうか。ヒトはすこし驕り、かつ奢りすぎているのではないだろうか。原子爆弾などというものをつくること自体狂気の沙汰だが、もう原爆などというのも古臭く、チャチなものだそうで、その何百倍という威力がある核兵器が、地球上にウジャウジャある。一方、松本という品のよさそうな地方都市で、猛毒のサリンがただよっていたりする。無茶苦茶に石油を使って、季節にかかわりなく、いつでもあらゆる野菜が食べられる。タイ米は捨てる。ル

ワンダでは子供たちが飢えて死んでいくというのに。

突然だが、音楽こそが、だけとは言わないが、このような驕りに対して、全面的にたちふさがる精神の営みではなからうかとつくづく思う。

三題ばなし、核・基地・補償

(「音楽人通信」一九九五年一〇月号)

フランスと中国の核実験強行に対する抗議の声は、いままでとちがって、粘り強く、世界に広がって、続いている。当然この抗議は、実験反対だけでなく核兵器それ自体への反対に連なる。

一方、沖縄駐留米兵の暴行事件は、在日米軍の地位協定の改定という問題を提起した。それ

は、日米安保条約自体への疑問、とくに沖縄をはじめとする膨大な米軍基地の存在について、あらためて人々の注意を喚起した。

この二つ、核実験抗議と、日米安保条約の問題は、深く関連している。すなわち、広島長崎の被爆体験をもつ日本人の、核実験反対という感情はたやすく理解されそうだが、しかし日米安保条約のもとで現にアメリカの——現在実験はおこなっていないが、フランスや中国など比較にならぬほど世界一の核爆弾保有国であるアメリカの——核の傘にスッポリおさまっている日本の抗議は、説得力がないという批判がある。

そしてこの二つは、第三の、日本軍戦地慰安婦補償問題や国会の戦後五十年決議の不徹底さとも連なってくる。なるほど、沖縄での米兵の仕業はひどい。しかし、アジアの人々はこう言うだろう、五十年まえの戦争で、日本兵は同様

のひどいことを、もつと大量にやった。しかも、米軍指令官はただちに謝罪したが、日本の政府は、戦後五十年間、ただの一度も、心から謝罪したことはない、と。

政治の話は嫌いな音楽人たちが、人間の、したがって音楽の問題としても、これら三つのことは深く考え抜かねばなるまい。

天変地異

（「音楽人通信」一九九五年二月号）

信じられない事が起こった。阪神地方を大地震が襲うなど、想像もしなかった。今になってみると、予想していた学者が警告を発していたということだが、その声は私たち一般市民には届いていなかった。関西在住の仲間たちにとつ

ても、事情は同じだったのではないか。政府の対応や、日本の縦割り官僚制の問題点などが指摘されていて、それはそれとして追及されなければなるまいが、今は何よりも被災した音楽家たち、キャンセルの続出で明日の生活のメドもたたなくなつた音楽家たちの困苦に思いをはせよう。

毎日の生活はどうなっているのだろう。彼女らの家族は、いくらか安らぎの時をもてるようになっていのだろうか。もしかして、音楽家としての仕事と生活の基盤を根こそぎ失つてしまうような仲間もいるのではないか……。幸いにして、我が身に災害のからなかった、全国のユニオン会員よ。ただちに、彼らを助けるために、できることをしよう。カンパを、チャリティーコンサートを、そして被災地慰問を。

一年たって

（「音楽人通信」一九九六年三月号）

あれから、一年たった。あれ、というのは阪神淡路大震災のことだ。マスコミのおかげで、想像をこえる大災害を全国の人々が目のあたりにして衝撃を受けてから一年たち、そのマスコミもとりあげようとせず、人々は忘れ去ってしまったかのように見える。

しかし、音楽家たちは、身近な大阪でも、遠く離れた東京でも、チャリティーコンサートを企画して、被災した人たちを励まそうとしている。出演するある指揮者は、ラジオのインタビュ

にこたえて、「被災者にいくら援助金をさしあげられるか、ということより、私たちはみなさ

んの事を忘れていないよ、という声が届くことが、大事なのでは」と語っていた。

今度の震災は思いもかけぬ大災害だったが、しかしまた、いつか、どこかで、だれかに、想像もできなかった惨事が降りかかるのも、自然と社会の当然の生理なのだ。

とくに高度に発達した産業社会だからその被害は大きく、人々の心に受ける傷も深くなる。人々が互いに思いを馳せ、声を懸けあい、何か自分にできることを探して支えあうことが必要なのだ。それも、今の社会に見合った、高度な、複雑な、精緻なそして重層的な仕方だ。

音楽は、そのための有効な手段となりうることを、参加した仲間たちは示している。

冬のイルミネーション

（「音楽人通信」一九九六年二月号）

初冬の札幌はもう、雪がちらつきはじめ。大通公園という、その名のとおり公園のように広い通りは、木々はもとより、さまざまなデザインのイルミネーションが色とりどりに飾られていて、お伽の国のように美しい。いつからこんな風になったのだろう。

そこから名古屋にとんだら、ここにも久屋大通りというのがある。木々とテレビ塔がやはりイルミネートされている。テレビ塔は札幌の大通公園にもあるが、名古屋のほうが高く、ブルーのサーチライトが夜空を照らしたりもして、一段とさえわたっている。しかし、通り

全体では、札幌のほうが幻想的で、はるかに美しい。

そういえば、去年の十二月はニューヨークにいて、やはりイルミネートされ、クリスマスデコレーションに飾られた街のにぎわいが楽しかった。ロックフェラー・センター横の広場では、野外のスケートリンクがあつて、子供達にまぎつて大人も滑っていた。

ところで、わが東京のテレビ塔・東京タワーも、昼間見るとなんとも不恰好な塔だが、夜は、イルミネーションのデザインが優れているためか、あの優雅なパリのエッフェル塔に匹敵する姿に見えないこともない。

エネルギーの浪費ではないか、と言う人もいるかもしれないが、人はパンだけで生きるわけではない。人が人間らしく生きるには、さまざまな文化的装置が必要だ。だから日々の生活を

彩るいとなみに、生涯をかける人もいる。

音楽家だつてそうだよ。

花

（「音楽人通信」一九九九年四月号）

或いは華。いま椿が、春の訪れを待ちかねたかのように、豪華に咲き誇っている。紅、白、まだら。一重、八重。

その向こうに、凜として香り高く、梅。椿が華麗なら、梅は高雅。また片隅をみると、黄色い水仙。これは可憐。

大都会の貧しい一隅にも春はやってきたが、今見える花は、これだけ。しかし、かれらは晴れぬ心を慰めてくれる。

愛でずにいらぬものを、美という。花も、

音楽も、同じ。ただし、音楽は徹頭徹尾人間の意識的造物だが、花は違う。花卉園芸家をはじめ、花造りに励む人も多いが、花の主役は何といても自然だ。

だから、花は、いつも優しい。花は受動的だから。ただただ滅入っているような時は、花に慰めてもらおう。病気のお見舞いに花が圧倒的に多いのも、そのためだろう。しかし、花はそこまで。例えていえば、花は病を慰めはするが、治しはしない。

音楽は、いつでも人に優しいわけではない。厳しいことすらある。しかし真正面から立ち向かい没入する人を、救い、高め、変える。し、慰め、勇気を与える。

いささか萎えているときは花に見入ってから、音楽に浸ればいいのか。いずれにしても春の訪れとともに、花も、音楽も、絢爛と咲き誇っ

てほしい。

「君が代」 斉唱

(「音楽人通信」一九九九年一〇月号)

「日の丸」、「君が代」が国旗、国歌として法律で定められた。音楽家たちの有志が反対声明を発表し、ユニオンの大会決議のなかでも反対の意志表示がなされた。

音楽人として一言すべきなのは、特に「君が代」の方だろう。しかしここではその適否、或いは優劣について論ずることはしない。多くの音楽人たちが、さきの声明にいうように「歌詞とメロディの結びつきをはじめ、歌詞の意味も曲のスタイルも多くの問題がある」と指摘している。一方すぐれた作曲家を含む何人かの音楽

人は、日本の歌としてなかなか良い、とも言っている。問題にしたいのは、「起立」という号令とともに強制的に歌わされることだ。

政府は、お互いに国歌を尊重するのは国際的常識だから、学校教育や社会的行事で躰けとして教え込むのだ、という。しかし、号令をかけて起立させて、歌わないものにはあとで社会的糾弾がなされるなどというのは、それこそ国際的常識に反するのではないか。私の数少ない経験でも、そんなことをする国は見たことがない。コンサートのスタンディング・オベーションと一緒に、立ちたい人が立てば良いのだ。

だいたい強制して唱わせる音楽が、どうして国民統合のシンボルになるのだろう。もし、号令をかけなければ、起立せず唱わないとしたら、それはマナーの問題というより、その「国歌」それ自体の問題、音楽作品として不出来で、歴

史的にも汚点を多く持ち、自然に国民が唄い出したい、という気持にはとてもならないというだけのことだろう。そもそも、号令かけて強制的に歌わせること自体、最も非音楽的行為であって、対象になった歌に対して、むしろ失礼になるのではないだろうか。

「国歌」再説

(「音楽人通信」一九九九年一二月号)

想像以上のことが起こっている。「国旗、国歌を愛せない人は日本国籍を返上しろ」と公言した知事に続いて、秋場所で優勝した武蔵丸に、NHKがインタビューで、「この次は君が代を歌って下さい」と言った。忌野清一郎の「君が代」の発表をレコード会社が拒否した。

「君が代」が侵略戦争と深く関わったからと嫌悪を表す人々に対して「君が代」遵奉者は、どこの国歌も汚辱の歴史にまみれている、と反論する。確かにアメリカの星条旗と国歌はベトナム戦争の推進にも使われただろう。しかし、三〇年前のウッドストック、ベトナム反戦音楽祭における、ジミー・ヘンドリックスの「星条旗よ永遠なれ」の演奏は、人間の独立と自由の尊重を理想として掲げた。「旗と歌」が、その時ベトナムにおいて、いかに汚され、踏みこじられ、ズタズタにされているかを一身をもって表現して、「アメリカ独立宣言」の基本に立ち返ることを、見事に訴え、伝説的名演といわれた。

フランス国歌についていえば、戦後もアルジェリアなどで民衆抑圧のシンボルとなったのは確かだ。しかし三色旗とともにあの根底にあるの

は、自由、平等、連帯というフランス大革命の精神だ。だから、保守の政府の暴挙に対して、左翼野党議員が抗議の意志を込めて議会でラ・マルセイエーズをうたう。

わが忌野は、「君が代」を苦渋を込めて、吐き捨てるかのように歌うが、その陰から、日本民衆のやさしい心根が踏みじられてきた悲しみがつと現われては消えるようでもあった。いずれにせよ、歌の関わった歴史を打ち消すことはできない。

初富士

（「音楽人通信」二〇〇〇年二月号）

正月が過ぎた。新ミレニアム―二千年紀に、コンピュータのデータ問題が重なって年末は騒

がしかつたが、なにか空しさが裏に貼りついていようだった。

そのせいか、この正月は静かだった——ただ晴れたる毎日が続くばかり。

もつとも羽根つく音もなければ、凧上げる姿も見えないのは、もうここ数十年の習いとなった。門松をたて、注連縄、柑橘を飾る玄関も少なければ、さすがに日章旗を揚げる家も目につかない。

年が改まるといつても、天体の進行は常のとおりで、もともとどこを新年と定めようもない。ましてや基督紀元二千年といってみても、何の根拠もなく、不正確な言い伝えがいまや世界的に広がったのにすぎない。もちろんこんなことは誰でも知っている。

にもかかわらずこれだけ長い歳月にわたって、しかも洋の東西を問わず、年越しだの世紀の初

めだのという習慣が続いているのには、理由がある。

自然の純粹な運行とは全く縁のない、人間の^{なりわい}生業、諸事万端の悲しみと喜びとが、ただ無表情な自然の歩みに、人間の刻印をきざませている。古い不運・愚行は古い年とともに飛び去って、新しい年には、少なくともまともに日を送れる新たな可能性だけでもやってくるということにしてもらわなければ、とてもこの世を生きられません。

そう思つて西の方を見やれば、夕陽を浴びた富士が整った稜線を逆光で縁取って屹立し、爽やかに衆生の悩みを祓い清めてくれるようにも見える。

初富士の 去年の水とも 別れけり

「ブエナ・ヴィスタ・ソシアル・クラブ」

（「音楽人通信」二〇〇〇年四月号）

世界中でミリオンセラーになって、グラミー賞をとった、キューバの老音楽人たちによるラテンのアルバムが映画になった。小津安二郎監督の作品を徹底的に研究したという、ヴィム・ヴェンダース監督のドキュメンタリー映画だ。アメリカロック界の異端ギタリスト、ライ・クーダーが、もう消え去ったと思われていた古老ミュージシャンを引っ張り出し、カーネギー・ホールでコンサートをやるまでを映画にした。

題名は、第二次大戦前からキューバのハバナにあった名門クラブ。主たるミュージシャンた

ちは、そのころからこのクラブで活躍していたというから、半端じゃない。七〇代から八〇歳を超した人もいる。ピアノリストがいいな。この人は一番年長ですでに引退しているのだが、なんと家にピアノがないのでこの十年ほど弾いた事がないというが、それはそれは、すごい説得力のある音をつむぎ出す。ギター弾き語りの、葉巻とパナマ帽が似合うおじいさんもすばらしい。パークツションも、ベースも、ヴォーカルもみんないい。音楽もいいが、表情もいい。

音楽の良さと、年老いることの良さの、両方が支えあつて更によくなることを、しっかりと確信させてくれる。つまり人間、この素晴らしきもの、ということだろう。生きる勇気を与えてくれる。

ハバナの街も素晴らしい。自然と民族と風土に年輪が加わつて、この説得力が生まれる。私

たちの仲間のなかにも、何十年ぶりかでレコーディングをし、コンサートにでたら、素晴らしいものができたという人たちがいるに違いない。誰かプロデュースしないかな。

聖オリンピック

(「音楽人通信」二〇〇〇年一月号)

二十世紀最後のシドニーオリンピックは二十世紀の人類の課題を先取りしているように見えた。

第一に、女性の活躍。これは、説明の要もない、特に日本では。

ついで、環境との共生。例えば、選手村は、世界最大の太陽発電村で、リサイクルされた再利用水を使い、食堂のスプーン、フォークも木

製で、使いまわしの後、最後は土に戻る。

第三は、民族の和解、融和。朝鮮半島旗を掲げた朝鮮韓国両選手団の統一入場行進は、会場を埋め尽くした観衆を総立ちにさせたし、地元オーストラリアでは、少数先住民アボリジニーの女性ランナーが聖火リレーのトリをつとめ、四百米陸上で優勝して、多数派の移民白人住民もわが事のように喝を送った。

戦争に彩られ、自然を破壊した男の二十世紀から、平和と環境を尊ぶ、女の二十一世紀へ、という明確なメッセージが全世界に送られたのだ。

ところで、開会式と閉会式を見れば、この大がかりなスポーツの祭典も、音楽がなければ始められず、幕もおろせないのだな、とわかる。競技場の式典だけでなく、大会期間中ロックやクラシックのコンサートがいろいろ行われ、ス

トリート・ミュージシャンもいつもの何倍も街角にでたという。

しかも、民族や性による差別を克服し、自然との共生を喜び、平和を求める点では、音楽の方が先を行っている。そもそも、スポーツとちがつて音楽は順位やメダルを争うことが本来の在り方ではないしね。反核や平和を求めるコンサートもたくさんある。ただ残念乍らオリンピックほどの影響力を持つ世界的な催しになっていない。誰か天才的なプロデューサーが出現して、音楽のオリンピックを企画してくれないかな。

あれから六年……。

(「音楽人通信」二〇〇一年三月号)

万、止むを得ず、辛い宣告をしなければなら

ない時が、この人生には何度かある。病気や老齢がからむ場合は、どんな人にも必ずある。これは、仕方ない、といって諦めてもらうしかない。事故や事件もほぼ同様。結局は、本人か家族かに、告げるしかない。

そんなに深刻ではないと思われる、仕事にかかわる事が、大変なのだ。職場を失う、収入が途絶え、生活がなりたたなくなる。或いはもつと軽く、立場が悪くなる、つまらぬ仕事に追われるようになる、という事態は、軽く見える。しかし、いやだからというべきか、納得することが難しい。諦めがつかない。

しかし、いかんともなく難しい事態というのは、ままあり得るのだ。その時、心を鬼にして、宣告をしきらなければならぬ。それが告げる人の使命なのだ。結局おくれるだけ、相手の損害が大きくなる。

もちろん不当な解雇、解散やリストラには断固立ち向かわねばならない。それは言うまでもないのだが、実際に仕事が行かなくなることは、充分ありうるのだ。

そのときには、素早く告知して、早く立ち直る機会を与え、未練がましくさせず、新たな旅立ちを準備しなければならぬ。発想を変えて全く別な方途を見出すことは充分可能なのだ。

この人間の世が続く限り、人間として鍛え、積み重ねた修練が役に立たなくなることはない。

まさに音楽が私たちに人の安らぎを与える、かけがえない救いだったと教えたのが阪神大震災のときだった。いつも唇に歌を、そして心に太陽を、だ。